

スペイン語圏を知る本（その41）

## 『ドン・キホーテへの誘い： 『ドン・キホーテ』のおいしい読み方』

古家 久世著

評者 坂東 省次

『ドン・キホーテへ』の世界をじつにわかりやすく説明してくれる本が、ようやく登場した。それが本書『ドン・キホーテへの誘い——『ドン・キホーテ』のおいしい読み方』である。本書は第1章[『ドン・キホーテ』の構成]、第2章[物語ダイジェスト]、第3章[ドン・キホーテとサンチョ・パンサ]、そして第4章[セルバンテスとドン・キホーテ]の計4章からなる。とくに『ドン・キホーテ』をこれから読まれるという方には、第4章の「セルバンテスとドン・キホーテ」の第1節「セルバンテスと『ドン・キホーテ』誕生の背景」から読みはじめることをおすすめする。ここではまず、著者ミゲル・デ・セルバンテス（1547-1616）の生涯が紹介されている。セルバンテスはカルロス一世（在位1516-56）の時代に生まれ、フェリーペ二世（在位1556-98）の時代に青年時代を過ごし、フェリーペ三世（在位1598-1621）の時代に著作時代を送っている。

それは「太陽の没することなき帝国」として世界の頂点をきわめた祖国スペインが、無敵艦隊の敗北（1558年）を境に坂道をころがり落ちるように没落の一途を辿る時代である。セルバンテスは祖国の栄光と没落の生き証人だったのだ。セルバンテスが『ドン・キホーテ』を出版したのは、著作時代である。

『ドン・キホーテ』のような世界的ベストセラーを出した著者の人生は栄光に満ち溢れていたと考える向きが多いと推測するが、実際は貧困と不運につきまとわれ失敗と挫折の人生であった。

『ドン・キホーテ』を構想していたとき、セルバンテスは人生の数々の不運を経験し疲れきっていたという。そんな中でも希望に燃え、「いまだかつて誰一人思いついたことのない思考に満ちた物語」を生み出そうとしたのであった。それが『ドン・キホーテ』だったのである。

セルバンテスの生涯と『ドン・キホーテ』誕生の背景がわかれば、次に第2章の「物語ダイジェスト」に移ろう。原作の章を追った「物語ダイジェスト」は、全体像をつかむ上で見事なまでにまとめられている。

『ドン・キホーテ』とは騎士道物語の読みすぎで頭がおかしくなり、世の中の悪を正し、弱き人々を助けるために遍歴の騎士となった郷士の冒険物語である。通常の騎士道物語の主人公なら若くて颯爽と冒険するところを、体力的には正義の担い手として武勇を振るうことなどとうてい無理な五十歳にもなった人物が主人公である。

そんな主人公ドン・キホーテは理想と現実のギャップから殴られ、蹴られ、傷つく。それでも彼はひるむことなく抵抗し、倒れてもけなげに起き上がる。読者はそれを笑い、我が身の不幸を笑いとばし、その一途さに心打たれる。

『ドン・キホーテ』は主人公ドン・キホーテと従士サンチョ・パンサが展開する奇想天外な冒険物語ともいえる。セルバンテスは自分の心の中の理想と現実の 藤と世の矛盾を描くために、理想像をドン・キホーテに託し、供のサンチョを無知で現実的な人物とした。しかしながら、この二人の関係は物語を通じて多様に変化する。第3章の「ドン・キホーテとサンチョ・パンサ」はその変化を綿密に分析しており、本書でもっとも興味深い章といえよう。

著者はこういう、「ドン・キホーテとサンチョは二人の人物でありながら、あたかも一人の人間の如く相反する二面を互に出したり引つ込めたりして物語に広がりや深みを作り上げた」と。『ドン・キホーテ』は理想主義者のドン・キホーテだけでは語れないし、また現実主義者サンチョ・パンサだけでも語れない。つまり理想と現実を生きる人間そのものの物語ということになる。

本書は、第4章の最終節で「セルバンテスの肖像画」を取り上げ、じつにさまざまなセルバンテスの肖像画を紹介している。おそらくこれだけ集めた本は、日本で最初のことであろう。本書の価値は、これだけでも十分であると思われる。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）